

三・四月合併號

目次

みいくさ集……………一

俳句日本作品……………二

評……………林雀背、妹尾美雄……………七

新俳句論考(五)……………西垣卍禪子……………九

俳句餘談……………井手逸郎……………二

指針を記す(六)……………中塚一碧樓……………三

碧桐梧忌句鈔…………………………一五

選句錄……………卍禪子選、一碧樓選……………一六

後記…………………………三〇

みいくさ集

雪に山々其姿に明けて決戦の年ことし
 沙騒夕べとなれば北を向いて海行かば齊唱
 木犀匂ふこと云ふてとほる生産戦士朝
 富士はくもりて浪のしづかな射場衛兵交代
 擬装し終り蟲の聲の月となりくるホサ
 秋がさんこうの中に此頃彈丸のくるでもない草がのびてある
 北斗は北に天の河こよひ完璧の守りにして
 再び征く日のことも萩の花咲いては散り
 窓に秋青葉と工場十訓傷痕勇士としてリベット打つてある
 風が影がもう秋で驛のホーム英靈に脱帽
 寒八つ目くれにきて戦の子の便り讀んでもろふので
 この夜戦果あがる陸奥の雪山月のくまなく
 きのふを十二月八日に雪かゝり八つ手は咲く皇天皇土海の花あくまで白く
 防空頭巾の下は白鉢巻學童鍊成の日敵機来る
 B29なんてと少年兵は蜜柑を食べてしまつた
 汚れなき民族の血潮神鷲は今日も突入する
 この感激を朝焼の空に叫ばう十二月八日
 葱一すぢ自給の一燈歸農に都心離る
 國旗今さらに首途の武者振子ながらに

三	南	松	大	中	川	秋	和	東	折	内	山	佐	畠	法	片	山	増
輪	畝	浦	熊	野	津	山	田	松	本	久	本	藤	山	雲	岡	本	村
橋	三	佳	敏	佳	一	紅	光	八	よ	根	篤	逸	實	寺	裏	耕	辰
城	坡	代	治	三	之	蓼	利	州	し	聖	子	仙	治	郎	人	生	郎

夜勤慣れきて半夜食事の大根煮を
 征くよ擧辞だよ後の無言が旗でうなづく
 服着けたまゝの霜夜もことなくて皇居をろがむ
 國へ命をさぐるのみ雪がきた山々
 奉仕七日稻刈らせ稻刈つて師弟愛
 深雪なんの完納までは薪日々山をなす
 いのちむたきはみなき今のときあわ神鷲ら
 機音遠のくはつら女學徒壕にわく合唱
 この目立てゝ雪が降りつゝ清淨海軍旗
 地に砲を構へ地に立ちて冬木立
 みんな前線へ征く氣持雪ふつてゐる中をゆく
 垂氷夕映消えてから兵舎の窓とざす
 戦闘わが心据り枯葉を干す地を踏みて
 こゝら木々立ち霧ふかき立哨兵士のからだ
 いちにちヘンマー打ち下しながら雪ふりながら
 敵機火を噴いて墜ち大河の水冬夜となり
 みぞれて索敵一本道あきらかにある
 霜に朝日さし命あるかぎり空襲にたへる
 夜の曇あかるい情報なき冬澹を感じ
 雑煮をよるこんで航空兵惜みなきいのち
 作戦に信頼す冬菜畑をあるく
 銃を構へるわがまは枯草が動く

故英 吉 更

早川 昇
 小川 一 灯
 照井 稗 人
 園木 六 食 子
 中原 路 雄
 今井 黙 天
 衣浦 眞
 中村 亂 水
 櫻澤 喜 作
 加々美 青 河
 大瀬 青 柴
 川島 南 海 城
 谷 しん い ち
 池田 亜 杜 子
 米田 稻 介
 今野 佐 伊 智
 星野 武 夫
 黒丸 古 生 夫
 佐藤 禾 黄
 田邊 愛 水
 山田 不 露 郎

俳句 日本作品

二度三度夜めげぬとこころいよよのる
柿梅さくらこれもこのとき薪に伐る

伊藤 秀雄

大橋 鏡作

雪廻りつ石炭運ぶいき戦意人々

今井 默天

冬は無韻の鳥飛んで吾家の庭先

衣浦 眞

ごろ寝に馴れつ然し替ふる床花一枝

井出 嘉水

盗られしと言ふ芋を堀るにもあの鎌

稲垣 一鳴

いよよ静かにけふの波の白やがて雪

南 省三

灯消し雪の夜ラジオの灯まぶたに
平凡六佛雪とくとくにひたります

星 鈴山

敵機遁走鐵帽とればまうへまるくくと月

直立 擧手 營庭の菊うごくくなし

新たなる我とし歸還神燈佛燈明るし

激戦地今は首を垂れて立つは日向葵

大島 蕪花

征夷えんじんドツドと寒風に機首むける

木下 惇

この夜珍らしく掃火豊かな心持をつくる

上 條 無庵

大根洗ふ疎閑兒童嬉々と背にも手にも

伊藤 農粹 夫

遺兒連れて里がかり嫂が肝薬

南 畝 三 坡

池はぐるりと枯れて出征の日の丸藁屋
波音も吹雪の中船つくる音

谷 口 一 溪

ただ祈る何もない朝空の涯、涯までも

中 原 路 雄

南からたよりが無いことをせつせと麥踏んで

伊藤 水 穂

これが終りの茄子つめたくつめたい手にてもぐ

戸 田 まゆみ

雨の音どんぐりの音板葺の湯殿の湯氣

戸 田 みゆき

樽上げて持くころの膚に感ずるもの母子

園 木 六 食子

日の丸家近く披ぎ繼いだ新薬束立てて扱ぐ

照井稗人

句を作る幸を飛行機通る山

征つ子へにぎりめし今年のゴマはほつほつはじけ

森谷乙山

梅はこの紅梅がいいまだ静かな田舎の青空を指す

櫛田東谷

大御稜威御祖の土冬草みどり

冬青空耳をさとくするひとり

鎌倉白羊城

松根堀る冬日土手の風はまつすぐ吹く

ただ雪の奥羽北上山脈のなかほどの月

宇野豕録

白骨となし雪ふる山の雪ふかくふみ

ひとり死なせた親の膳のへに坐り餅くふ

餅のくろいのも戦時疎開の子の便りもくる

山田一艸

冬木幾本も見ると銀の供出すませ

河のべに月は木を挽く音に始まる

岡を領して太松に柀薫る屋敷

平賀星光

冬田の鴉みえてゐて爐端のたばこぼん

加賀谷灰人

踏切り番が制服の姫で時雨明るう晴れゆく

森抱葉

必勝立山は雪をかぶつて冬に向ふ

戦争勝つまではの氣持人に冬くる

加谷賀廣

冬朝行きに行く楮土道の強いあしあと

松浦佳代

小さい停車場で陽一ぱいのふるさとに着いた

八ツ手の花がこぼれて冷たい目覺め

山口和子

ちつと仰ぐ冬の空冬の雲高く

一めん日が輝き家のぐるりの穂の芒

中原我樂

山茶花の垣から顔を出す明るさその顔

舟中人々身を寄せ合ふ雪頭巾の人も

味爽地のあかりこゝに草にうすく雪して

岸雉泉

国歌齊唱われらの顔に雪降りとける

義士の碑と碑とならび立つ椿のかたい苔

凍夜一里の道川音の方をこゝろざし

少女嬉々水汲む水仙はひなたに咲く

清水月丹

吉原東畝

雲垂れ雉子が鳴くかたへ草の實
みんなへおにぎりわたつた枯れてよもぎ原
手大きくぬくゝ桑の葉がのこり

今川 溪花

山べ村人に逢ふ挨拶草のもみぢ
紅葉する木々散見走る騎馬の一隊
霧晴るゝ河口に動く制空部隊の一隊

佐々木 四雨樓

皇土遠く雲飛べり草は枯れてうつくし
冬となりこの日晴れたれば隣人目隠す
冬の林けむるときわれとわが身を感じ

池田 亞杜子

そして橋一つが冬空がいちにち軍靴のひびき
この朝の夜明けながらの兵隊みんなの毛帽子
新年の雪白くかぶり父つさんぢやないか

加々美 青河

隣人とゐて枇杷の花澄みて越年す
銀回収事務進捗雪に白くなつてくる窓のべ
一日子となれば何かほのぼのと冬木のさくら
子どもと見る朝を杉の木杉の葉につもる白雪

福島 一思

松の木あり冬の日男はその間にて鋸を引く
その櫻冬木のみちを急ぎゆく人とあひたり

葱畑葱の青し子供が手にもつて十能
この家の入口をその奥の竹藪を冬の日

渡部 嫁ヶ君

榛切りつめてたきぎに冬籠り子等と
枯草の原植ゑある松のならび常陸を毛野に境す
樹のある山の間のおち来る雪深からず
雪舟道うづもれてあるにいらすまつすぐお寺に入る

白石 花馱史

兵一隊をむかへ稻架のかわきたる道
南に刈田がひらけてある少年飛行兵にゆく
刈田うちつゞくにおもふこと神風特別攻撃隊
沖の干潟へおりゆく淺淵堀りのほそいをはさん

加藤 羽双

敵機に心かまへ家の落葉大かた掃きし
神鷲の出撃がつゞき庭石は霜深くおちつく
敵機來る夕景に羽根をつゞく少女
眞ちか高射砲隊枯草ひろきまゝに住まるゝ

細木 原青起

冬まち牛のにほひする牛車にむらがる子供ら
子とその母とちる葉の中をゆく話し
硝子障子に映ゆるもの冬の色ありてうす日さす
群鳥一群一群が飛びゆく冬木を前にし

宮林 釜村

東方海上一目標消滅したまゝ冬夜

風沁みるしもやげの手に持ち芭蕉文集
人住み八つ手の木深く切り込み
寒の太陽人われを追ひ越して行く

蓬菜鶯郎

國に働く學徒の腫澄めり冬朝
爆音遠し冬木せる山の冬雲
篋口水ゆれて居る雜木紅葉の中
濡れ葉濡れ巖にもるゝ陽の光り冬朝

谷 しんいち

兵一隊みえずなる藪の竹の雪
秋の目地のおほばこの草そして話する兵ら
冬の目川水光り野を馬車ひいてゆく人
地に今朝に雪ふり小さい木の根方

若林乙吉

部品つきつきに出てくる殘業夜の冷え
工場白菜なども植ゑて地響き
山道我が蔭しゆく栗すこしを拾ひ
葎山に来てずつとみづみながめて吾兒と
敵機編隊を亂して走る方星々光り

九貫十中花

こどもが寝る時のもんへ首巻もしたり
不發變夷彈持った人が何かいひ霜踏み

隊員喜びある如し窓にみえて梅の木冬木
盤備員とし愛嬌のこといふ厚い靴下をはき
冬の目大きな飛行機見たよろこびにゆく沙地

山田宗作

よき朝野の大寒の池と池の堤と
せんだんばらばら實を落し寒風いしぶみの前
冬木うごくなしはつきり大悲堂見ゆる
神に白す地の霜うす明る杉の根(參宮二句)
しこの民こころいま捧げつる木の凍て葉

高橋晚

ものものあり冬の夜の厨火消盡しつかりとあり
池に遠くにかいつぶりを焚火してゐる人々
ものをたべるみな有りがたく冬菜一皿を食べる
をさなきがちゝはゝをたのむにも似たる冬草みどり
刈田二三枚こゝも防空の櫓へ屋根に梯子立てかけ

南晴星

池の氷割り葉つる或時立ちて身のまはり
笹原冬日湖に獲りし魚提げてゆく人
勤勞樂しさを持ち子ら霜ふみいづるものおと
正光すこやかに隊へ出發水仙あなを葉をそるへ

友の遺作銀器供出

これをよろこびさゝぐ松を葉牡丹を盛りし壺

内田南伸

醜翼撃ちてしやまむいまで伊勢の冬雲
冬木幾本も見ると銀の供出すませ
僕も梅もどきも冬をほしいまゝ晝の陽
樵夫今日もはいる雪の降りし雑木林
雑木伐り出す雪しぶきに山の大きな男

林雀背

星のなかゆくゆう／＼友軍機一つ二つ五つ
敵機いつでも來い落葉掃いて南天の霞まつか
高射砲やみ子供まつさき壕を出て月夜
來た敵機の爆音をこんどこそきかうと月夜

松宮寒骨

山ぶだう房なりにこればけもの道ほそい
その星高く河ひろく下る船
烏瓜木うごくにうごく朝
冬のやう鶉網を張り鶉笛をふき

原鈴華

み民ひとり兵營明けそめし聲あげ(入隊前後、四)
擲彈伏す戦車兵のまへ戦車あきらかに
戦車に肉攻土燃えこの兵いつの日前線
兵みな勲諭をしのゝめの又月明る日々

奥村四絃人

巨いなる醜翼雖採日輪おもむろに移り
高射砲に照空燈に年移るきほの夜空
膽いよいよ敵機に肥え餅のねげりいたゞく
何はなくも親子そろうて餅祝ふ身をかため

安齋櫻砲子

山見れば國を念ふ雪晴の山みな白し
雪沓よこれなく歩く村へ八方へ日々
晝それぞれの家人の聲桶の寒紺黒し
藁沓で來て近づく北風の家の壁
竈を出した炭を炭麩の男の顔を風吹く

朝倉九鶉子

喘ぎながら大鳥賊空を泳ぎゆくやうな
敵一機來し火彈一投火の手無い海だつた
防空装ぞ霜凍む戸出の晴れつゞく正月
あかれだつ家並墨繪の富士の薄らに

細谷不旬

霜ばしら踏んで來る兒ら壕へ入つた兒
垣根の霜觸れまじく逕ずるぶん來た
北風ふく中兵隊がひいて來る小牛から身

ときどき人をとがめる門衛木斛冬葉

喜谷六花

誰となし特攻隊の神々に供ふこゝろ冬椿

冬木の中の彖居冬木の中路うねり

山國山見ぬ山罩めて動かぬ冬雲

枕邊にぶい光り冬夜この夜に備ふ鐵兜

梅蕾固し學べ無言の強さソ聯

中塚一碧樓

こゝに死ぬる雪を掻いてゐる

梅咲く顔が大きい山下將軍を子供と話す

屋根の雪は大方消えた小母さんのこゑ

一つ湯呑があり梅の木ことごとく咲けり

早春空あをい斬込隊員に選ばれし一人

西垣出禪子

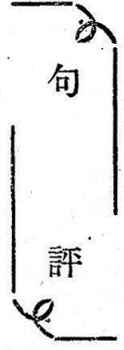
女の子を出してやる戸口の霜を踏んでゐるかぶりもの

次から次まで踏まはるまゝ春と見ゆる日のお前と私

この小犬たれか拾つて来てつなげる午までの雪

戦も雛の日近く花賣る店の年どしの花菜

齋は遠くへ行かずともあるさうして正月家の邊



句評

林雀背、妹尾美雄

機銃うつ砂地にて汗ばむからだわが軀

(繁時)

【雀背】作者は〇〇隊とあるからどこかの隊での作であらう。「汗ばむ」で、機銃への精神力と夏から秋へ移りゆく期節感が窺はれ、作者の戦ひへの志向も或程度感ぜられる。そして「わが軀」、こゝに皇國の世界無比たる剛健にして崇高なる、忠勇無双の精神がいついかなるところでも軀に底流してゐる、といふことの内容の下に作されたことが感受されてわが身も引締るのである。が、どういふものか機銃から火を吐く苛烈な戦ひを戦ふ戦闘員としての敢闘精神の迫ってくるものゝ感ぜられないのは評者の期待が間違つてゐるのだらうか。

【美雄】第一線で見敵必殺の構へと云つたその氣魄は受取れぬやうだ。或は演習の場合なのかとも知れない。

かやつり草かやにして村の子ども疎開の子供 (野 蔭)

【雀背】最近疎開學童に關しての作品が多くある中に、この句は眞に子供の習性と地方色をよく詠つてゐると思ふ。そして作者の日本の情愛の溢れを以つて好感を呼ぶものである。従つて内外律がしつくり密致してゐる點に敬意を表する。然し、これからの句はこの境地に留まることななく澁刺と、うんと飛躍した情感からの制作に進まなければ取残されてしまふであらう。

【英雄】「その階段を上がつて右の部屋です」と教へられて行つてみると、部屋の奥中に切つてある爐の側で、四五人の子供が銘々に蜜柑の皮を剥んでそれを炒つてゐる。そして「蜜柑の皮を炒つて食ふととてもうまい」と云ふ。この頃毎日雪が降つてゐて、東京からこゝへ疎開して来た子供たちは、放課後部屋の中だけで遊ぶことに馴れ、飛行機を描いたり、蜜柑の皮を炒つて食ふことを發明したりする。この「かやつり草」の句なども、都會の親御達が想像したり同情したりしてゐる幻影とはまるで別な生活だつた。そして自分達のやうに田舎で育つたものには微笑ましい思ひ出でもある。

一兵の母なり胡桃など干してゐる (自由也)

【雀背】 軽く表現してゐるやうで、なか／＼さうでない。時局に徹した作者の眼は普通人の考へ及ばないものゝあることを首肯させる。それは作者の永い間の句修練から出来上つたもののみではなく、人間本來の修養道に酔入した深い根ざしがあるからであらう。

今日、ある種の騒々しい作句境の漂つてゐるとき、靜かに味ひ考へてして學ぶべきものゝある作品だらうと思ふ。

【英雄】 胡桃と云へばいつの形を想像してそれと定めてゐたものだが、どうして信州の胡桃と支那産の胡桃とではまるで形も味も違ふさうだ。そしてこれは信州の胡桃だ、それがまた丁度取扱はれてゐるやうだ。敬服。

山にくらし秋のけしきあさあさわが家

(宏)

【雀背】 「くらし」「けしき」どうも香律に落着かないやうだ。作者の心は落着いてゐるのであらうが、その心と表現方法に缺けたものがあるか

らではあるまいか。又も少し具象的作者的感情を現はして貰ひたいものである。

【英雄】 爆撃だ掃射だ、と脅かされてゐる時に、これはまたなんと靜かな境地であらう。それもいゝ、然し今の自分達には何か異つた遠い風景のやうに感じられるのは何故か。

油の香もいもうこんなになつたおれの服である (乍)

【雀背】 巧まなくあつさり纏めて而かも引締つた表現に作し上げた作者の技量に敬意を表する。凡にして凡ならず、平にして平ならざるかうした俳句が今日要請されていゝのではあるまいか。而かも今日の時局を充分綴り抜いてゐてその感激に囚はれなくちつくり落着いてゐる基底の下に表現されたことに於て。

【英雄】 奉仕隊のそれでもあらうか、油の香とあるは切削油の香か或は機械油の香であらう、「もうこんなになつて」といゝ／＼に考へられる。

疎開の子等同じやうな顔で遠山雪をいたゞく (南 卿)

【英雄】 この部屋の四年女子十一人、みんなお河童。起床の鈴が鳴ると一様に蒲團の中から顔を出し、半身を起して、蒲團の間に入れてゐた眼を出して着る。同じ様な顔、同じ様な動作、實に紛らばしい。十一人が一齊に顔を出した時、そこへ蒲團が一ぱい被さつてゐる時、父親はきつと狼狽する。作者と同じ事を體驗し、所謂世間並の「面會」をして来た筆者、殊更に感銘が深い。

新俳句論研考(5)

俳句の世界に就いて——基礎論

西垣 正 禪子

生活即表現・意味の意味把握

第二には、認識と生との統一の根據を人間の體驗の存在論的深み(根本體驗——反省的統一)に求め、認識(ホエシイ)を豈に充實させようとするものである。根本體驗に於ける共感とは、外部から感性的に興へられた記號からして内部を把握するところの過程である。體驗の存在するところにあつては、外的なるものと内的なるものとは一の全體に統一されてなり、ただ抽象的にのみこれを分離し得るのである。従つて、體驗は共感されるものと必然的に一の全體をなしてをり、體驗そのものが謂はばこの全體の顯現(眞の共感)であり發展でなければならぬ。

(註)俳句を規律するものは律意識(認識ホエシイ)であり、ホエシイの表現は言語或は文字を媒材とする。而して、この言語文字は、俳人の想念とともに生長し一つの實在による言葉にまで發展する。それ故、媒材がただ記號として止まる時は、想念は單に文字の形に規定された事に過ぎなく、このような文字は時間的なものを空間的なものにしたに過ぎない。時間的なものを空間化せしめる爲には、——想念が一つの自己意識への自覚活動として意志の方向にはたらくときには、詩の媒材は、それ自らは常に時間的なものでなければならぬ。されば、言葉は物質的なものであり詩にとつて手段の意味を離れるものではないが、言葉とリズム

ふとのつながりが統一(表現的統一)せられるところに詩が成就するといへるのである。ここに於いて、現下の俳句に於ける技術といふ事と、型體の獨立といふ事に就ては、批判の餘地を残すものである。

(註)我々にあつては、作品自體の表象は價值尺度となり得ない。事實としての内部知覚は、たとへ、内部觀察と區別せられるものであつてもそれは本質直觀を想ひみる經驗の場所に過ぎぬのである。ここに價値の概念が導びかれるが、價値が既述の本質直觀の意味的實現に規定されるとすれば、我々の新俳句作品は價値の顯現であり、價値は實現にのみあるといへる。俳句の技術といふ事と、藝術といふ事を考へるとき、藝術は技術であるがすでに技術は藝術ではない、といふ關係を知ることが出来る。そして、あらゆる現象に於ける自然的と精神的と乃至歴史的とを問はず、現象そのものの意味は現象を論理的に先だつところのもの、純粹認識(根本體驗)によつて明らかにされることから、この現象を意味づけるものを、つまりその論理として先だつものを、我々は實現(表現)と稱する。

ここに於いて、無限絶對的生命實現の行爲、即ち純粹認識(根源的美の理念)としてホエシイの追求は、古風な本體論(俳句は自然的ホエシイの表現とするもの)でなく、實現學といはれようし、この實現學の認識ホエシイによつてのみ、我々の俳句作品そのもの、つまり、現象そのものの意味が解されるのである。

(註)純粹感情とは我々にあつては、生の必然的欲求としての感情或は無限的絶對的生命と稱する。無限絶對的生命(藝術美)の表現である俳句は、本質的純粹實現(表現)である。現實のもの(俳句作品)は意味關係的である。認識(ホエシイ)とはその「意味」を對象に組織することであつ

て、本質直観が我の内に(それは純粹一般的に)我(個性的生命)を對象として限定することである。これを自覺するといひ、純粹實現(根本體驗)といへる。純粹實現はよくみづから組織することであり、認識(ボエツイ)はこの「意味」の組織に於いてなければならぬ。まことの「意味」の働(根本體驗)は自覺する純粹實現(反省的統一の表現)に於いてある。

本質直観の意味もまたそこにある。「知るにせよ」「行ふにせよ」純粹實現は自覺して、その純粹一般的なものなかに個の對象實現を我から組織することではなければならない。その組織は自覺するのであるからこの自覺を分析すると、媒介されることのない直観——我の分析は必ずしも媒介するものを必要としないが媒介的關係だといへるであらう。それに二つの場合が考へられる。我が我々の分析、これは純粹に自からに内面的で、媒介の原理が我のみから興へられる。又、他から我が分析される。

これは媒介するものを我の外に持つ、然し、同一に於ける反省は全く我自らな原理とするのである——が内の反省に個の實現をみ、未完結のなかに完結する。従つて、そこに純粹實現が辯證法を働くこと、又、それが反省に現れて完結の段階的系列を造ること、その系列が全く純粹實現の我に我の飛躍であることを考へ得る。認識は純粹實現の實現であり、組織の段階性を持つてゐるのである。

又、本質實現の實現方法は本質直観である。我々の人間經驗は總て實現活動であつて、必ず方法に於いて行はれる。尤も、この場合の方法は人間經驗そのもの(事實)でなく、經驗を内から超越して導びく「意味」である。その「意味」を、意味そのものに就いて論理的にいへば、方法であり、意味表現の現實(作品)に就いて心理的にいへば、態度であらう。然し、この經驗の意味としての方法は、人間精神の意味表現に對象として

指さされるものであるから、論理的なものであり、それだけ完結するこゝとが出来ない。即ち論理が論理に終ることが出来ない。たとへ直観を方法とするにもせよ、論理の根源に形而上學的なものが要求されるのである。かくて、新俳句律(認識ボエツイ)の純粹な本質直観は、我を場所とし自覺してあらゆるものを組織する。組織は根原的統一であり、反省に動き、實現に我を反省して原理する純粹一般を求めながら、それに於いてそれを個に否定するのである。組織する實現即ち根原的統一の表現はいつも自覺的であり價值を現すものでなければならぬ。ここに於いて我々の俳句(藝術)表現の經驗には、純粹藝術(美)の本質に導かれて「意味」としての表現方法が持たなければならぬといふのである。又、我々の精神表現は、純粹直観される本質から必然に意味を現實に指さす表現でなければならぬし、「意味」の指さし方が本質から必然に意味にかなつてゐなければならぬのである。即ち、根原的意味にかなつたもの意味表現、これが我々の精神作用の方法である。本質直観は、従つて、純粹實現であり純粹實現のまこと(意味の眞理)は、内部知覺でなく論理的反省である。即ち、イデア的にただ我に於いて我を見る直観によつて把握せられ、純粹實現が自覺してあらゆる實現を可能にするのである。

されば、純粹實現の實現は先驗論理的なもので、ここにのみ意味の眞理は認識され、我々の俳句(藝術)に於ける生活希求の問題が孕まれるのである。又、まことの認識は總て根原の原理に於いて作用しなければならぬ。その原理みづからの發展は辯證法であり、その内の段階としてまづ同一の原理を、次に矛盾の原理を、しかもあれからこれへと内面的必然の關係に於いて持つのである。同一の原理に於いて働く對象みづからの反省は、もとより同一の判断であるが、それも既に我に矛盾するも

の純粹な否定を根原的直観的統一のもとに含むことによつて可能なのである。この原理によつて成立つ判断の方法を同一の範疇（世界）といひ、純粹なうちの反省によつてその同一を確められる對象は、既に對象構成にあつてそれに矛盾するものの否定を直観されてゐる。そのある對象に矛盾するものが、その直観のもとから更に同一の原理によつて積極的に統一されるならば、そこにも一つの對象構成があり得るであらう。この對象とあの對象とは矛盾しあひながらしかも各々我の同一を保證しなければならぬから、それらは關係の方向を論理的に交換しあふことの出来るものでなければならぬ。この關係を他性といひ、一つの概念と他の概念とが相等しいとは他性の判断の一つに他ならぬ、この他性の原理に依つて成立つ判断の方法を相等の範疇（世界）と稱することが出る。我々の完全な共感とはこの精神が精神を感じる直接性である。かく純粹實現の實現は先天的的判断の方法に立ち、經驗によつて獲得されるものでなく、經驗に先だつて經驗を可能ならしめるものゝ意義である。かく經驗に先だつて經驗を可能ならしめる働きが先天的作用に外ならぬ、經驗に先立つことをば先驗的といふのである。

作 句 餘 談

井 手 逸 郎

作 家 の 旅

作家はゆきあたりはつたりのもの、一寸さまの分らぬもの、つれに目

分を超えてゆくもの、自己意識に於て無軌道のもの、それが作家である。明日の日の句境とて指呼しがたい。作家は明日の日の奇蹟に遭遇することを今日知らない。

作家はつれに蟬脱しつゝあるもの、一日として停頓しないもの、それ故に明日の日の奇蹟は分らない。自分は作家の境遇に思ひ到つて、時あつて嘆き、時あつてまた歎美を禁じ得ない。野ざらし紀行でも奥の細道でも、あれらは、作家が自己超克の歴史であり、今日の句あつて、明日の句境の分らないものであるところの作家の、その日毎に出現した奇蹟の連続である。作家は旅してあるもの、明日の旅路の出来ごとは一切判らない。それ故に勇躍する。明日の句へといさみゆくのだ。作家の運命は一句によつて廻轉してゆくものだ。自分たちに芭蕉のやうな境遇が惠まれたらどの位幸福であらうか。野ざらし紀行を前にした芭蕉の心は新風樹立の氣がまへで希望にふくれ、氣魄にみちてゐた。吉野紀行は芭蕉一代の内ではいちばん楽しい紀行である。奥の細道は、益々深い相を見せてきた自然の奥所にある細道を辿らうとした芭蕉の記録である。野ざらし紀行では句の中に文があり、吉野紀行では、文の中に句があり、奥の細道では文の奥に句がある。細道の文は逍遙の變である。けれども芭蕉は邊土行脚の逍遙の中にも鋭い句心を磨いてゐたのだ。人生的に俳句を受容としてゐるのだ。人生と自然とを、作家芭蕉の天蓋に頂きながら、そこから滴のやうにおちてくる甘露味に味出しやうとしてゐるのだ。さうして最後に芭蕉は、運命の暗たんの中から虚無絶望の方でもつて、最後の旅へと旅立つた。この旅はもはや受容ではない。棄却である。自分は芭蕉の作家の旅路を想ひかへすたびに暗然とする。

提 擧

作家の旅はやみくもであるから、提擧といふものはあり得ない。芭蕉のさびしなりといひ輕みといひ不易流行といひ、これは皆「提擧」と考へたら大間違ひだ。芭蕉が苦しい作家の旅程途上に得た作家の自己證悟である。だから芭蕉には、さびしなりや輕みや不易流行やの解説はない。正風だつて旗じるしてはあるまい。作家には旗じるしよりも、この證悟の方が大切だ。

凡そ作家が旗じるしを立てたときは、作家的な攻勢終末點と考へてよろしい。虚子の花鳥諷詠、碧梧桐の新傾向、子規の寫生——これらは提擧と見られる。さうしてこれらの提擧のあつたところ、それらの作家はそれぞれの作家の攻勢終末點にあつたといつてよい。努力の結晶が提擧であるけれども、作家の運命は遂に提擧によつてしげられる程安易のものではない。明日の作家的奇蹟は遂に今日豫測を許さない。自然といふものは、作家の躍進につれて益々深い面貌をもつてくる。

提擧といふものは、提擧となるまでの努力のあとに深い味があるのだ、提擧となつて拘束するものとなつては凡そ非作家的である。衆生濟度の道は提擧にあるのではない。作家棄却の道にこそ濟度の道がある。芭蕉に作家道の追求はあるけれども、提擧はない。正風の悟達はあつたけれども、遂に最後まで暗たんたる苦さんの作家道があつたばかりである。子規だつて、眞實寫生といふものを解説してある文章をもつてゐない。

初歩作家は初めは提擧によるがよろしい。けれども遂に作家の道は自己證悟である。攻勢終末點に達した作家は提擧によつて苦境を糊塗す

る。自分たちは旗じるしは伏して遮二無二に突進したい。

面

面(めん)といふことを近來考へるようになった。畫家のいふダイヤモンドといふやうな意味でなく、作家の打込みの楔の個所に於ける面といふ意味だ。

この面といふものは、作家の進展によつて、變るものではない。作家は、初めから、この面を打撃しつづけてゐるのだ。自分ではそれは判らない。しかし先達にはよく判る。もし自分で、自分の面が意識出來たらもはや作家の領域にあるといへる。

自分の經驗をいへば、自分は十數年來一つの面を打ちつづけてきた。けれどもそこには突破口はあり得ない。自然は須臾にして突破口をふさいでしまふ。さうして打撃によつて、その作家の自然は益々駄してしまふ。深い深い貌におちゆく自然を自分はハッキリ意識しはじめた。自分の作家經驗に於て、こゝにいふ自然の貌に接するのは始めてだ。

大東亞戦争によつて、自然はいよいよ深遠に重厚になつてきた。きびしい面貌だ。これは恐らく作家の心が鍛へられてゆくことに於て、かやうに見られるものに相違ないが、また自然そのものだつて、戦争によつて、自己を厳しく鍛ふるの氣持はないであらうか。ソロモン、ビルマと苛烈の相は日益しに進みゆく。日本の自然だつて、このさ中の氣魄きびしくよるはない筈はない。

自分が戦ひにきたへられゆく眼ざしで、この厳しい自然の戦争の貌を打開してゆく以外に作家の道はない。片々たる戦争俳句ではない、これは俳句の大道だ。益々深淵なる貌に向つて自分は一步一步進んでゆきた

い。戦争の貌は自然を變貌させてはゐない。けれども自然はたしかに、ひきしまつた深い貌になつてきた。自分は作家として、この自然へ打ちこみをつづけた。俳句作家の報國の道はこれ以外にない。身じろぎしない自然の貌を顯示することは戦ひに勝つた一つの方途である。自分には日本の山河の不動の麗勢を俳句にしてみたい。

指針を記す(六)

中塚一碧樓

秋起つ草原の風は草のほひす進軍

羽根田繁時

進軍の時、草原に吹いてゐる風に草のほひを感じてゐる其心の澄みやうは、これこそ清純なる、ものよふのこゝろと云ふべきであり、何となく古武士の風格さへ思はれる。夏草のいきれる強い匂ひとは異なり、これは秋の日の事であつて、どちらかと云へば微かなる草の匂ひであらう。されば作者も「草原の風は……」と云ひ出たのである事大いに頷き得る處である。

「秋起つ」は「秋立つ」ではなく、「秋の日に、起つ……風」の意であるは無論である。

寡黙日本の男八つ手花さき

高橋晩甘

日本人、殊に日本の男が寡黙である事は、その心持誠にゆかしく美しい。

その美しい心持が今、八つ手の花の麗がに地味に咲いてゐる風情に反響して如何にも鮮かに感じられたのである。

寡黙である心持はゆかしいと云ふものゝ、それは單なる床しきには止まらない、そこには八つ手花咲く如き、ちつと底力を持つてゐる沈毅なる氣魄が感じられる。句の表現も誠に端的であつて潔いひびきを持つてゐる。

風いでは鯉釣れぬ沖ななぜ鴨は飛ぶのだらう

九貫十中花

べた風に風き切つてゐる時、てんで魚の釣れない事あるは釣するほどの人の誰もがよく識つてゐる處である。今しも、さうした氣拔けたやうな境にあつて、作者は沖の方を飛んでゐる鴨をちつと眺めて「なぜ鴨は飛ぶのだらう」と子供のやうな心持をもつたのである。作者が此際「なぜ……たらう」と云つたのは「鴨は餌を求める爲に」或ひは「鴨は……の爲めに」といふやうな、さうした調子の「なぜ」でない事は無論であつて、作者は、鴨が飛ぶ事それについて直接に、「なぜ鴨は飛ぶのだらう」と童心的に一つの驚きを覺えてゐるのであり、そこにすぐれた詩情の昂りを見るのである。

童心即詩心、詩心即童心、さうした事が今更のやうに考へられる。

ひよこに手をさしのべる炎天の木かけ

深澤夜舟

情愛すぐれたる一句である。對手がひよこである事から「手をさしのべる」情が如何にも鮮かに感じられ、場所が「炎天の木かげ」である事によつてそれが如何にも的確に表はされてゐる。

句面は一寸云ひ放しのやうな所も見えるが、凝つて捏れ廻したものでりかどんなに感じが佳いか知れない。讀み下した時、思はず微笑を感じるとも恐らく評者ばかりではあるまい。

自然書を掘り上げその空の雲かたまり

吉岡南巨

素朴なるこの心持に賛成する。事柄そのものが地味であると同時に、漸くにして掘り上げて、ほつとした氣持に、その時の作者の目にこぼるに映つたものが「空の雲のかたまり」である事は亦地味でいゝ。

「その空の……」といふ「その」といふ心持には容易に同行し得るのであるが、此同行は一寸考へものゝやうにも思へる。或ひは「その」を割愛して「自然書を掘り上げ空の雲のかたまり」と詰めてしまつた方がよかつたとも思はれるのである。その方が句心の素樸が一入に出るやうである。

ひろしぐれる家の中に見えて火の燃ゆ

高橋良太郎

人の世のいとなみ、人のいとなみといふやうなものが、こゝに明かに浮き出るやうに表現されてゐる。「ひろしぐれる」といふ情緒から牽きつけられるやうではあるが、此場合の「家の中に」といふ事は素直であつて、而も勝れた懐びを絞つてあるとともに一句の景象をも的確にしてゐる。

この「家の中に」が最もいゝ働きをなしてゐる事を見逃してはなるまい。

少女は兄兵隊をおもふ庭落葉を焚きて

守矢自由也

庭で落葉を焚くといふ比較的平凡なやうな事柄から却て少女の可憐な情がしみじみと出てゐると思はれる。

庭で落葉を焚くのは決して珍しい事でもなく、特異な景でもない、それがかうした効果を齎してゐる點を注意すべきで、努めて句材を撰むといふ様な事よりか、先づ第一に、本當の事を絞るべきであると、こゝでもさう考へられるのである。

巖大き二十立つ三十立つ礪ひき潮の冬旦

長屋青橙

男性的な荒礪な景情が宛らに表現されてゐる。時が「冬旦」である事もこれを強く感ぜしめる一因を爲してゐるのであらうが、つか／＼と「二十立つ」「三十立つ」と放膽に言つてある處に生き／＼とした力を感じる。「巖大き二十立つ」といふのと之を比べて見ると、この句心が如何に眞個のものであり此言葉が如何に生きたものであるかが判然するやうである。

句の表面に敢て「大和島根は」と云つてはゐないが、さうした心さへも誘ふて来る。堂々たる一句と云ふべきであらう。

※ ※ ※ ※ ※

碧梧桐忌句鈔

二月四日於梅林寺

人々くらきにたへん二月よるよるの道の凍てゝ 傘 露

湯氣の立つものを家畜小舎へ持つて行つてやるらしく 稻 市

一とき兒童が通つてしまつた道邊雪に日射し 眞 魚

みんな御國へさゝげてる如月飛行機雲をも仰ぎ 天 耳

生きて墓守る雪を掃く雪の上の核 六 花 碧先生を乗せし小舟梅かほる漁村を離れ 三 六 亭

凍てゝ碧梧桐墓ある西北吹く中 不 句 寮の濠の水さゝなみ宮城安泰 溪 花

碧梧桐居士墓宇の餘韻冬の日 葵 雨 城 南天の貨に埃が舞ひ碧忌にゆく支度する 十 中 花

空のみどり碧忌のあき天大いなり 寒 骨 椋の木葉あり冬の日にわが身邊を感じ 一 思

故人に「雷鳥の雛手にすうと〜と眠るかな」の一句 我子空へとぶこの寒天真直にあるく 笑 風

ありしをおもひて 碧師の額冬の句でありこれを仰ぎ寝てゐる一日 晴 星

鐵火鉢を撫す雷鳥の雛のせた掌 釜 村 冬夜など少しからだゆすよて句作する癖の碧師だつた 晚 甘

眠ふ日の碧忌おごそかに四方雪の山壁 六 石 先生の忌日を迎ふ鹿兒島の小さい蜜柑を思ふ蜜柑をむく 怙 寂

けふ寒明けの焼いてたべる白い餅 五 郎 雪晴れた空B29を撃ち落すを先生に言ふ 一 碧 樓

選句錄

田中富士郎

渡邊信雄

誓必死はるか皇居遙拜曉寒風にあり
任務新た寒風の中峻とし君の別れの言葉
雪の上に柵もえず煙の中へ飯盒さえかへる

田中富士郎

水仙よゝかかれて寒の雨の朝

朝の霜は大根の葉にまだ洗濯竿のシャツ

川津一之

待避壕出た子等の可愛ゆく防空姿にて冬菜昌

鐵兜手袋夜半の枕許にそるへ子ども

敵撃つべし冬雲ことに輝きて友軍機突入

飛機組む秋晝のその音を徴用の身尊しと

園木六食子

學童鎌納め晝の疲なく列に在り

遅し學徒らに對面の列われら主婦の除

學徒らすくやかに變た山門は消燈す

顔よせた乙女らはぢらふ何もない刈田休み畔

人の世永く神仕へますその笏の澤尊とし

照井禪人

水音してあるさまはみさゝきの萩はきれいな
二三句この山にある幸秋がゆく山

まけられぬいくさいくとせつとどく道の笹鳴りて

津輕の温泉街のしきり浪音か船の笛

森谷乙山

印肉の緋はいろくに版木に躍る霜夜更に寂し
雨氣のお寺さすがに春だいろくな禽の啼くこゝち
燈は葉裏にまで染みて冬に大きなつめたい銀盆
南天の實は日の丸のやうに白光は京陶器を感じる

櫛田東谷

別れば冬草の風に立たされ口のかわき
日がな松風をきゝ行儀をよくしてある

木枯子供のものほしき顔

關口比呂志

畑の灰焚くむら時雨小袋であるく
聲のはるけき人々霜晴れ鼻はしら凍む

稍残柿の霜腐れすとも知らぬ(ルーズベルト四選)

西垣碧禪洞

手紙は早椰子の葉上に十字星それだけで良し
炎天の下鉄振ひ原住民兵と共に夕焼けぬ
便りすを何にとてか守宮またなくを

水を待つて丘も雲も雨を呼んで赤道下廻ける砂

鎌倉 白羊城

佐藤 鳴風子

この街へ燈は二つ見えてゐる北風

日筋の中の絆鯉が鮮やか三日前の残雪
花菜道來るあかり往診の俚紋どころ

鈴木 梅宇人

霜夜何時も橋を渡るゝ家の燈

清朗の聲の鶴友を呼ぶか日曜の一時
告別式の落葉浴びて外套を手に

宇野 彥 録

こゝは山多う御座んす山の雪山の初日

病癒え手に若松みどりを挿し

藤下 ふさ

決戦五年目のつげものたち海港眞冬雪ふり

この子いたいけなしくさ姉となる日も近く見ゆ

米倉 勇 美

工員の顔と手冬夜の太き影する
とんく稲屋と氷とわが心を締めにし
戦争してゐるんだ足袋など足の皮でいゝさ

大島 穂 花

山から並んで子供の兵隊軽く口笛吹く
壺蟲の音止まらず青空幾日れてゐる布圍

上條 無庵

海軍の造つた廣中路の廣い路幅

仙丈が眞白歌をやめ幼な兒を指さす
まつ白まつ白雪の廊下踏み鳴らす朝の兒等

石井 夢 醉

ながれ翔べば疾しことし雲しるし
大氣凍える翔ける氷花まきつゝ
ペラ廻りだす俺は離陸の手をふる

伊藤 柳江

青々疎開畑むかし濫谷いざ岡かばむ

秋ざれた三峰峽大根葉野面峠から

伊藤 農粹夫

ながれ翔べば疾しことし雲しるし

陸歸る稔の稻を足がらみ笑み敷へ

木下 穂

陸歸る稔の稻を足がらみ笑み敷へ

池上 耕山

大氣凍える翔ける氷花まきつゝ

陸歸る稔の稻を足がらみ笑み敷へ

池上 耕山

ペラ廻りだす俺は離陸の手をふる

陸歸る稔の稻を足がらみ笑み敷へ

池上 耕山

正月衣裳のどの子も防空帽キチンと羽根つき

陸歸る稔の稻を足がらみ笑み敷へ

池上 耕山

冬日水打ち 鱗夷落下恐るゝものか

陸歸る稔の稻を足がらみ笑み敷へ

池上 耕山

冬日水打ち 鱗夷落下恐るゝものか

陸歸る稔の稻を足がらみ笑み敷へ

池上 耕山

脱殻の音に炭焼の話して一汗を
桶と征く萬歳の響き欲して村

南 畝 三 坡

戦争しいく内開八代明朝敵闘初ラショ
ののさまいくつうさきさんいくつ三ヶ月豆腐凍つ

谷 口 一 溪

子を征かせ親も征くこの朝さらに雪のふる
翌は進水する雪山焼けて鐵うつ音

伊 藤 孝 一

初日海風 三機 三機 と 飛ぶ

空の兵隊次ぎく送つた山の幼児若鷲の唄上手

伊 藤 水 穂

氷柱がまぶしい水車があつて道教へてゐる
木に葉がない岳の近くて襟たてゝ歩く

中 山 百 姓

冬山戸口から来る茶碗置きて見ひとり主
今年も煙り伸びて降影寒く炭寒く供出

大 橋 鏡 作

夕べ雪の降り来ておぼろ見る大いなる月
月のある晩で寒くもあらね雪の降りつぐ

久 野 仙 雨

日々擧る戦果日々寒くなる師走

葵 吉 更

知己若人の散華指折つてみる夜寒ム

山 口 江 浦 草

朝餉までそこかしこ雪閉づ烟のうもれ菜
日がな斑ら雪山そこの邊二連続

早 川 昇

思母劉曉或は雪とし掌に撫づ
三つ星硝を閉て硝子ぬち居ることの寥欄

川 口 三 角 洲

高々度雲引く落ちてくる落葉畫
家々宵やみ黒きは遠き富士を見る

今 井 黙 天

空澄む底ゆくつきり谿の白ラかんば小屋

衣 浦 眞

蹴つ飛ばし消し吻つと雪屋根おりの快

井 出 臺 水

一ト霜にいよ映ゆ柿ゲリラ空襲に
午の警報で團欒のお事汁が間に合ひ
衣服疎開に水飴を持って来た間値の話

稻 垣 一 鳴

日さし遠雷笑ふことのきのふけふ
妙高の時雨と見ゆる雲いつから
おん日早や雪二尺宵の月にほふ

平 賀 星 光

見事な野菜とて床置に今日も試砲響いて来る

加賀谷 灰人

飯あたゝかく下げてゆくに冬田の水

冬田の二三枚水たゝへ山が根

森 抱葉

浴衣で畑に出る朝の山に冬が来てゐる

加賀谷 宏

室を出てけさの霜軍事郵便

机の位置をかへるとわが室正月

赤星 竹酔

しば鳴く鳥にしばぶきたてつゞける

敵機の塑像を幾度も波にさらはせる

野鳩法師蟬アルミ貨が土にまみれきつて

岸 根 榛 一

榛の木の雀馬そりの停つたところに下りてくる

白藤 十九三

秋晴れの子と國民學校がみえてゐる

天主閣のけふしづかな秋櫻(弘前城趾)

赤星 圭伊子

水槽の水を割る夜空の星が多すぎる

吉沼 晴穂

暮れてゆく驛は軍歌が置去りになる

田代濱 女生

秋風木の實を足許にころがす

渡邊 まき子

山は晴れと言ふ納屋の日だまり炭俵あんでる

清水 ちる子

羽根つき羽根よ上れみいくさの新春の空へ

松浦 佳代

通年動員素足で霜をふんで通ふ

山口 和子

山茶花が思出をさそふ陽の中に立ち

島野 和子

實南天風がゆすつて日が暮れた

高田 千代子

病む母柱時計の音ばかりして向きをかへる

大熊 敏治

何んとなく人通りの多いこの町御注連賣つてる

久保田 和磨

いくさどこまでも勝たねばならぬ朝餉の箸が

千蒲園ふくれてゐるうらゝに梅の小枝

山風尖つてゐるこのころ梅の蕾

山木 六合

栗の穂いつか地にめいり乾かぬ道の茶の花

爆風障子にかそか背中の子おとなしくなつて

渡邊如蘭

足もからの水筒も投げ出し山のけはしきかたる

西牧言人

征くへ今更の話なく寒夜を一本のビール

戸島三更

日なたありがたくてうつらうつら徹夜の疲れ

川岸疎開の原となり都鳥今年も来てゐる

千葉大帆

病む母へ歸郷もせず元巨働へ出る

凡夫の子を叱る影が障子にしるく雨

田中加六

渡邊優女

徹夜の子へ門あげたまゝしらじら霜に明け

お隣りは夜出て朝歸りめいめい増産の霜道

富永耽兒

森郁子

黙しきる兄へ黙つてお茶ついでしんしん雪降る

飛機組立終り工場の扉あく秋晴

池田總女

岩田安基子

ペンチいつか温くまり使ひなれてゐる

初秋の海すつきりと鳥々夕焼けてゐる

岡田初繪

小川一燈

短日の松めぐらして療園日に枯れてゆく

冷たく拭き終り防火水に朝月の影

友定白鷺

木本梵天

秋の並木落葉する雨の中赤い郵便車

吹雪馬糞の鈴がたまさか聞える

秋吉碩田

立花しげり

霜に日がさせば藁屋の片側の苔

暗暮つくろふ手に年末が来て黄昏

丸山羊三

丸山羊三

泪し戻る子なだめ入れる薄暮飛行のばくおん

月松に出て工場らしくないとイむ警邏

中村竹雨

中村竹雨

娘夜なべに軍帽を縫ふ節電の燈の下

氷卸されてゐる雪消えぬ程に小さ棧橋

會田明

會田明

巨き木の下そこに住みつき軍神を出し

墓は波音に静もり坊さん拜んでゐる雪雲

疎開されたか星空寒々戻るとする

加藤迷々可

み魂かけり國守り神とますみ空澄み
星すど冬空の下大地をばさみヒットラの叫び
燃ける空を見て待避するかよ雨しみじみと冷え

上原晃雨草

夜あけの體のいきほび冬來たる
年の瀬のお膳をならべ遠い海洋島々

山田蒲公英

一 碧樓選

守矢自由也

雪いちめん警報の夜を馴れてある
雑煮食へしあたよかさ遠く戦にある弟をおもふ
涼風の畑のあをし麥出でよあをし
人ゆく人に景ありて冬木くろく立つ
氷柱風に吹かれたかたち朝日がさす

吉川金次

空ひるし必死出撃がつゞく冬の日
さうして冬芽固い櫻の木にわかれ征く
凍夜一夜を家にすぐ原隊へかへる息子
旋盤とまることなし月の光れる寒夜
神兵まこと平凡な顔葱汁をすゝる

星野武夫

十二月吾子を埋める青木をさす
漂泊をかんじる一筋冬の暖をくる
吾子埋めてしろくと刈田に雪ふる
命絶ゆるせきれい疾く冬日をとぶ
母を子を拜む冬田の畦に立つ

相澤華芳

わが工場空襲の被害なし袋に少鴨雪あり
市街ことごとく武装冬朝川に鷗がとび
お神みどりに冬の日職場に神様をまつり
ありがたく同じ大きさに餅をきる壘に坐り
冬の夜母が軍手をつくるふに太い白糸

三國屋白省

龍骨海へ向き造船工具冬の日
雪散る日海からゆつくり船が入り来る
歳晚日のいる町がひとすぢ家並
窗があり鳥が鳥鬚歳晚或日

根岸榮一郎

米にほふ草枯れてものう婆さん
草かれて、或日古人の刀を見たる
山羊あさのこゑ遠山へ雪來たる

石榴と辨當とあけきらぬ部屋
柿をもぐ青い一つを手にし日中
稔田をすぎる遠い方が海の空

芒の穂高くゆれる 艮道をゆく汗ばみ

林

鳥水城

冷える日の 薪割る妻を見て呼ぶ

冬の日女子乗務員のおこ紐がつよすぎる 發車
寒い日のもんべさん穿いた子にどんぐりの木が高い

長谷川 杉郎

かるい冬著の子どもたちこゝ湖の波たゞず
きいろく落ちる公孫樹の葉神を信じ
月の夜冬木立ち工場に工場に音あり
ちらちら雪の日の一つの爐世間

龍

田真魚

夕照雲からさす山穂芒のみち
雪のなか篠のひとむらひとむら河向ひ
雪もよの雲厚く大河みづのながれ
榛の木林がよくわかる冬の薄月夜

吉澤 稻市

月白の馬をひき時々冬空を見て 駈兵
少年兵白い手袋をつけ冬野を踏んで来る
旗日の街に雪解けて来たさうした父と子
早春一筋の町を歩くにわが額

川

島南海城

勇士を慰むる花を持ち時間をもち乙女ら
松の枝の上にある冬日のあたゝかく小山にのぼり
晝頃はこの位のあたゝかさに土と枯草
冬の棕櫚の葉の家の繩綯機之音

伊藤 彌太

一心舟に強い心を持ち綱を入れた冬浪
山が暗くなつて 藪を掘り出した地の枯葉
遠い山暗く舳に波うけて漁人の舟板
家内聲ある父母にして馬の顔に降る雪

筑

波波秀

やはらかな冬雲だ小さな山を描き
大きな冬雲ださうして山暮れてゆく
わが繪わが側にありうすい冬雲の繪
炭斗から炭をつぐ近き山を感じ

西山 刀耕

来れば山のみち落葉がしめりどんぐりしめり
雨にぬれた八つ手の花と雨をとんで来た雀
濃きいろりんだうの咲くが戦果日々
木がかけし山がかけし冬の日山の池

山

崎多加士

松山の松から日さし霜朝の一部落

ちかごろあかぢあみき既に嵐氣するどく
二條城外畠にして落苗ふせしさま
鐵帽大軍列どんぐり木よりこぼれ
白餅焼きはじめたり席にすわる

冷ゆる日酒保に入りわれらひるげの飯をたうべ
粉雪ちり枯草のところどらむ罐とわれと
冬晴の空の藤音敵機あきらか墜ちし
女の子やさしくなきをり窓硝子凍みてゐる朝

米 田 稻 介
田 邊 愛 水

日本必勝われらにあり冬菜の鳥
きびしく戦をおもふ麥の芽のみち
松根を掘るわれらあつまりて火を焚く
地に決戦す地に山茶花咲けり

黒 丸 古 生

梅もどきはつきり空のいろを見る
石に霰ふる流れに沿ふて馬曳いて行く
雪ふる夕べの窓しるし寮の子ら
工員一隊入所す風花とぶ煙突太い目の前

後 藤 零 丁 子

恙なし冬朝の地霧たち皇土なり
悠久大地あり日出づるをながみし冬朝
冬夜月の影し女防空のかまへに
子供とゆく拜殿へ正面よりすゝみ冬朝

松 宮 磨 研

雲の日大根を引く親と子に丸い大根
船の子船で育つ頭巾かぶりし

松 本 西 平

串の鯉沙魚乾く近くの山の曇る
手に燕重し外套おもし時雨るゝ野みち

林 さあを

少年航空兵にならうとし日さし貨茨
そこからけむりがたち冬ふかき谷の岩いはほ
鏝さげたこともにすこしついでゆく日の砂
冬日夫人と立ち垣の根のくさ青きにて

山 田 不 雪 郎

母の委炬燵の火絶やさな
これをかざして見る赤い實の蔓梅もどき
踏まれて枯草があり一機組み立つ
女腰太く牛の足太く炭着けてくる

吉 岡 南 呂

銀杏葉落つる殿は平でない巖
落葉を山に登りつめしところの松の樹
冬めく野の岩のてつべんのぼり少年
音は氷流るゝまゝきしみつゝ

近 藤 紫 村

凍て南瓜を食へるみな顔揃ふ吾家
ゆき卸さうにもこの雪嵩に陽射し
夜空あり吾がふむ雪柔かく
安南うつしのすゑものゝかたち冬の日

みいくさつゞく枇杷の花さくに棲み
日ざし草枯れこゝにひとつある石
人聲すこの家の軒低う南天の實り
一方の雲うごくと思ふこゝに麥藁く人ら

日 田 朴 也

空の雨を見つゝも葱の青葉をたうべ
金魚動いて冬の日底へとどく一所

刈田を上る丘は黒松その針葉
大根赤土のまゝにかゝへし陽を拜む

田 中 豆 翁

澄柿の日當りのよさは人あらず
露が肩を見せてゐるよるよるげんきと共に
今日流水の音が高いじつとある冬
征け征けみんな征け冬田を見て私

伊 藤 碧 洋

嚴寒かひげ噛む音の肥えて黒馬
縦の木の枝々嚴冬の雪に堪へつ蒼空
雪棄てる櫓に角あり少女と少女曳いてゐる
椿は椿の葉は冬にいきくと見てゐる私の氣持

瀬 尾 一 風 子

午飯を食べてから背戸くちが開いてゐる冬の日
そして冬藪をのこして下りて征きたり
山の兔の寢床のよりくちの冬の日

堀 川 屈 人

そして几帳面にたゞみにすわる冬菜を漬けし

相 場 汀 石

苦をあむ生涯のいちにち日ざし冬日
地に椿の實落ちてゐるそこに祈り

墳墓に親しみある山の栗の落葉
冬川の流れ馬に水を飲まして軍隊

牧 野 秋 風 嶺

花枇杷一枝瓶に挿し狷介にゐる
山中人來るなく疎ら木の實

びげの花こぼるゝ家のべのせゝらさ
巖そばたち横ひるごりの黄葉一本

山 本 光 王

路の草枯れ忌日犬はさきへ走り
枯葦深くずつと手綱を入れかへる男

枇杷の花のほのかなにもないを行く朝
松根つみかさね冬日あたりそめし地面

菅 木 葉

刈田の道ゆく男魚籃を提げふる雨やまづ
松の木たかく田の中に紅葉色濃き一樹

水なき田川の岸のうへ積葉しめり
小雨ふりつゝ冬田で働くを君を呼びかける

さかみち家の石門ひくゝ栗落葉

しづかに子供のあたまにふれ厚い防雪づきん
冬磯満潮に澄む岩がかくれる
くさ柔く枯れ磯みちしづかな波

藤 森 澤 瀉

まづ紳入帽子をぬぐ挺身隊少女
寒いこの朝ルンンばるかなり工員うごく
厚い帽子をかぶりうめもどきをさげる
柔畑雪にうづまる立科山まるいかたち

辻 午 子

川口歩む暮れゆく砂原芒原
川べはなれず歩む路なりからすうり赤い
足袋を白くかへしなる燈管妻の仕草
燈管白い菊いく夜か机の書類

島 林 庄 作

友ありわれらが畑の麥の芽のみち
暖冬いちにち垣の中に雪を拂ふこゑ
爆音遠のく梅のかたい雷を感じる
母ありて寒夜を燈すわが家

佐 藤 嶺 山人

庭一方は石榴落葉黄にして
瀧の山やまくづれする潮の色ふた別れて冬海
岸へ茨の實紅くなる堆肥の土かき上げ
水に目高群れて川とつゞく田に男網す

伊 藤 二 一 郎

船の中皆兵器斬るに元日の雪うすくかゝれり
船少し傾きし兵器積込む人々の聲吹雪く
南瓜の蔓枯れてゐ海に向き監視兵
山はかげつてゐるぶだう食ひ少し細い蔓に

守 矢 日 出 男

星座あり必殺の氣魄満ちて冬空
われら學徒なり冬の空冴えて青し
轟音かすかひゞきくる時雨るゝ壕に入る
木々冬木の中に立つ我が血潮を感じず

中 村 亂 水

征つた香子なれば街中の雪に照る月
いちにち雪を卸しをり川の方からとんで来る鳥
どすゝ雪卸しはじめた桐の木立つてゐる
神鷲空の一方を通りしおもふゆふべ粉雪ふる

金 子 曙 山

青木が實つゝましも山風に岩肌
八つ手花過ぎけさの厚い雪を揺ゆく
この時山から大吹雪僕に橋桁がある橋
寒ゆるむ雪一樹のもくれんありて

半 田 雨 衣

少し雪降るを來しこの家こゝにある
朝の地凍解けず麥肥をかつぐ三四人

雪かく親と子と頭巾もう夜が明ける
この部屋の視界で冬木その方へとぶ鳥

加々美 絹子

奉仕隊の人ばかり朝焚火のうすいけむり
わが子があるくに覆の冬木しつかと立つ
つとめなへてあゆみくる少女に冬菜畑青い
日に咲きしわびすけと防空頭巾のわが子と

赤松 榮二

秋朝あかりまだ動いてゐない工作機械
窓から野菊も見える少女は旋盤操作をつゞけ
干草が匂ふ家のうちから出て来て男
ゆけば野菊やら山の方で鳴く鳥

御所 窪けさじ

川に水ながれ氷がひかり冬の陽ひかり
冬木枝々があり夕雲があかるくて暮れる
雪道すこし凍りはじめてゐる工場から歸くる人々
道を兵のゆく姿遠い雪山と雪の田と

沼 文生

敵機の来るを思ふ凍土を踏んでゆく
夕靄に焚火して先生と生徒との庭
黒髪を鏡にうつす少女に正月がくる
裏のこゝに栗の木があつたいま四角い芽麥畑

秋 元 櫻 水

闘病冬に入る庭木の胡桃の木立ちし
粉雪降れば枯草ゆるゝ徑ある家
凍りついて動かぬ桶といふみそさゝえそこら飛ぶ
井戸側圍はれずある粉雪降つてゐて晴れる

佐藤 禾黄

そらくもり一群れの子供ら池の水をわたり
蕪汁たべる座を立たうとしないひと
海を見て来て屠蘇をくみ職にあるこゝろ
いちにちのみちつける踏儀あらたなるかたち

泉 大 畹

雪路山頂に一つのよく光る星
雪みちをゆく牛乳房垂れて乳牛
雪ふる薬硯レーテ思ひつゝ打く硯
生木が生木の臭して燻る女は手をかさし

永井 はるを

通草の味なつかしみ川音のたえず
この幸をおもふ冬窓明るしもわれら
したし父と子とおこす山際の土黒き土
冬夜母と居てたべるこれは小魚

澤 渡 尚 之

歩み來て山なれ層に溶ける雪のあり
逸れ入る柵道の氷雪滴して松枝
朝の言葉に帯かたくしめ元且

工員福笹高くかゝげ雑沓に徑あり

松原 颯々

試作の稻のみのり戦死されぬる

漂着機雷爆破させ雪のうへ青天

漁師ら濱のこの冬の汐木を拾ふ

吏員忠實な藁沓を爐に乾して

井上 星樹

笹やぶ雪ふりちつと動かない放牧馬の親仔

窓より氷柱折る少女に晝の日はさし

川に氷片ながれ岸に舟つなぐ男

饑買ひ戻る人の群濱の雪うすしるく昏るゝ

新田 巢州

とびとまり居り國原にあられの打ち下す

年の瀬に立ち雲間の星を見上ぐ暮れ切る

葱を立派につくりある冬野人影まげら

冬日あたゝか山の陰影強く山に對し

藤田 三六亭

少年工が罾物砂掴みては打つ雪明り

工員と語らひつ雪路に肩の揃へる

雪切りさばく子の屋根屋根のこゑ

山薯吊るす居間人來れば爐による

谷 桑水

兵良一死せり山根片が生え白い根

まるい月がのぼつて雪降る街全體遮光

山のとびとに山人のほひあり炭使があり

山に雲やゝにひくう子供たち落葉をかき

廣い道のほじを通るこの無花果實の青い

みやしる地のくろく草みな冬の草

家のおもて山茶花の垣のかたむき

茶の花が咲きし山水がくる家の溝

少年兵としゆく海に吹きこむ笹

枯れて野菊あり女に漸く澄みし川水

芋の子を洗ひしひるがる山の夕焼

笹の光に歩いてある十二月山道

冬の日ざしはあり疎開兒童に爐火あり

列車のうち混んでる雪帽子かまはない男

空の光りありわれらに雪のとんねる

今宵の月稻田に照りわがからだに照り

冬雲覆ひくるに一方日がさして青空

道ばた野菊咲いてあり稻刈つたばかりのあと

こよひ柿をむく山住み一家一燈をかゝげ

鈴木 邱石

平井 青三

三雲 城東

高橋 日東子

月夜稻を刈り終へし一段低い刈田
吹雪を來て正月の座蒲團厚い
冷ゆる夜の話し切れないで出づる明るさ
決戦日々冬の竈火を燃し

石塚碧郎

潮のいろす黒い牡蠣舟近より
空の護りいよゝ堅しこゝら草枯
わがゆくみち流れにそひて藪柑子
何々寮といふ女の寮冬木ちいさく

谷口矩良

壕を深く掘つてから焚火へ鬨す吾が手
着ぶくれて來る人の八つ手の花あたり厚霜
大根をひく作業傷兵に雲厚くなる

佐藤西呂

冬の月を前われら一隊全隊整列
孤島一島初雪あかり
冬海潮風松林うごかざ

大淵青柴

雪山晴るゝ山に對ひ兵ら號令調整
これら神兵のすがた雪上匍匐演練の兵
村口を出て雪なか吹雪へ尖兵進發

村上幸吉

山寮松風松の下山茶花ひともと
賜はりし杖とあり地に冬ばらのにほひ
蜜柑の大ききころがり一燈のもと

工藤折葉

兵は一句を置きすぐに歸るも積雪の戸口
窓あり時に吹雪を見る無電室終日戦記
決戦大雪降り無電室に寒菊咲きしあり

田部直枝

南天色づきしをいふ少女のことは何氣なきゆふべ
明日を柴木こなすしごと窓から見る星々
雪ふりし朝にきくをさな兒のことはかり

田邊苔香樓

わづかに焚火の煙たち御與藏の大き錠前
征く友と話すに堤一體の枯草
水兵の弟とありくに遠き冬の山肌

下平天耳

凍つるなく屋根の雪ありすゝめら
西はるかに拜す多摩の冬雲を祈り
今日一帯の冬雲機音どれもが特攻

櫻澤喜作

男のまじはり深まり朝の草の霜
吾につゞく吾が子幼い地にうす雪
寒空の雲しろし敵機味方機

伊 東 秋 蘿

供出米は終り早い雪の高い山低い山
吹雪の止みし沖からの浪高い浪

渡 邊 杏 甫

高 橋 安 榮

早く退けてきて路々蕎麥の刈りころ
青年復唱秋雲動く

杉 野 一 羊

藁沓の藁ぬくし歩いてゆく
冬木擽ばかりなる坂を下りる

佐 藤 かめ 雄

落葉拾ふ丘の枯草波のやう母とその子
工員さんと歸るうれしさ冬の陽おちて

淺 野 一 草 子

歸りゆく人の鐵兜月あかりして
疎開あとの空地冬來る野菜あをあを

中 村 昌 作

秋朝田に牛追ふ男と鋤く牛の白いいき
落葉した一木のかたちゆふべの空の青い雲

仁 科 孝 子

ひそとくるふるさとは雪の土手ひくく
母とありし日は軒ひくき雪の日

渡 部 東 迷 路

女鎌をとるうす霜ある田圃
冬の松根うづ高く決戦この氣持

岡 長 次 郎

丘あり傾斜あり雪を滑る兒登る兒固雪
晴れしつらゝの光り雀鳴きやまず

西 村 嶋 吉

冬木の構へ空一劃のあかり

中 村 耿 人

家のまはり正月菜の凍て光るばかり
いまだ雪をみなく畑地のもの椋鳥ありき

豊 田 青 坡

火鉢に對座し戦傷を話す人の端坐す
少女が去り菊の花いけてありこの部屋

山 本 巖 太 郎

決戦即應工女たち工場にある出入口冬日
眞弓の實が赤いなど知つてあて子供が遊ぶ

瀧 浪 龍 雄

冬日の道をゆく首擧げはせず姉と

杜 三 樹

編輯後記

○今や前線も飽後も論議は無用である。日本民族は厥然起つて國體護持に全力をあげて突撃しなげればならない。萬世の爲、太平を開かむことに俳句人も又ある。我々は少しも怖れることはない。大勇以つて試煉に當れ。さすれば道は國民の一人一人が眞剣に結束するところほひらけ、一糸みだれざる恢復となる。かくの愛國心は皇國護持の新俳句精神より湧發し、我ら行爲の俳句精神の認得體現の要なることは、今日より痼習なる秋はないのである。茲に新俳句集團と、俳句日本の意義が深く藏すると云はればならない。

○本號より「俳句日本」の眞の一元化を劃し得た事は喜ばしい。「俳句日本作品」と云ふ旗幟は、何よりもその證左で、眞の一元化の實現である。去る一月には、出版會の方々にも御出席を乞ひ、全委員會を開催し、然して「俳句日本作品は三選者の互選」と云ふ根幹を

確立したのである。茲に至つて俳句日本はやうやく光榮ある新年を迎へ得た次第である。これは諸氏の總力戦に御協力下さつた賜であり、我らは、御皇室の彌榮を祈り奉ると共に、皇軍將兵の奮戦に感謝の誠を捧げ、誓つて「俳句日本」の使命達成に勝ち抜かんことを期するものである。

○扱て、本誌の發行所と印刷所とが此度震災の爲罹災した。俳句日本は全新俳句壇の機關誌であるから、何んとしても再起を計らねばならぬと決心して努力した。その甲斐あつて今日諸氏へ本誌を送附する事が出来て心から喜びたい。本誌の再刊に就いては、出版會の宮崎、寺澤兩氏から特に御鞭撻を賜り、一同はどんなに歡喜した事であらう。茲に御厚禮申上げる。焦土に崩え宵つ戦意、それはあくまで試験戦に勝抜かれねばならない。そして、今ぞ活かせ我が新俳句陣營の底力を……

○誠に残念であつた事は、厨雲と連絡がつかず早急に編輯をまとめねばならなかつた事情である。厨雲の不夢がそれ以外他意あるものでない事を述べて置く。(中瀬子)

投稿略規

俳句日本作品
 萩原井泉水選のものは神奈川縣大船町建長寺前萩原井泉水へ
 中塚一碧椹選のものは世田谷區上馬町三ノ一〇五〇中塚一碧椹へ
 西垣出禪子選のものは足立區伊興町狹間八八七西垣出禪子へ
 ○句數十句以内、楷書にて清記、居所氏名を詳記のこと。
 ○句稿は右三氏のうち一人に宛て直接その住所へ送稿されたし、一人一月一稿一選者に限る事。
 一、締切 毎月十五日
 一、購讀誌代の拂込は従前通り舊各誌の發行所宛に小爲替にて願ひます。但し新購讀者に限り必ず「新」と明記して「俳句日本」社へ送金せられたし。

本誌定價

一冊分 金七十錢(送料)
 六冊分 金四圓二十錢(送料)
 十二冊分 金八圓四十錢(送料)
 ○前金なるべく小爲替で御拂込下さい。
 ○必ず何月號よりと御指定の事。
 ○御轉居の際は發送部宛御報下下さい。

第一卷 第九號
 昭和二十年三月廿五日印刷納本
 昭和二十年四月一日(同一日)發行

發行人 中塚直三
 編輯人 西垣隆滿
 印刷人 石上利雄
 東京都立川市曙町三丁目五番地
 印刷所 行政學會印刷所 東京五

發行所 東京都足立區伊興町狹間八八七
俳句日本社
 日本出版會 二五〇四
 會員番號 二五〇四

配給元 日本出版配給株式會社
 東京都神田區淡路町二ノ九

錢十七金價定

(明治四十四年四月二十七日第三種郵便物認可)
 (昭和二十年九月一日(毎月一回)日發行)

昭和二十年八月廿五日印刷納本